

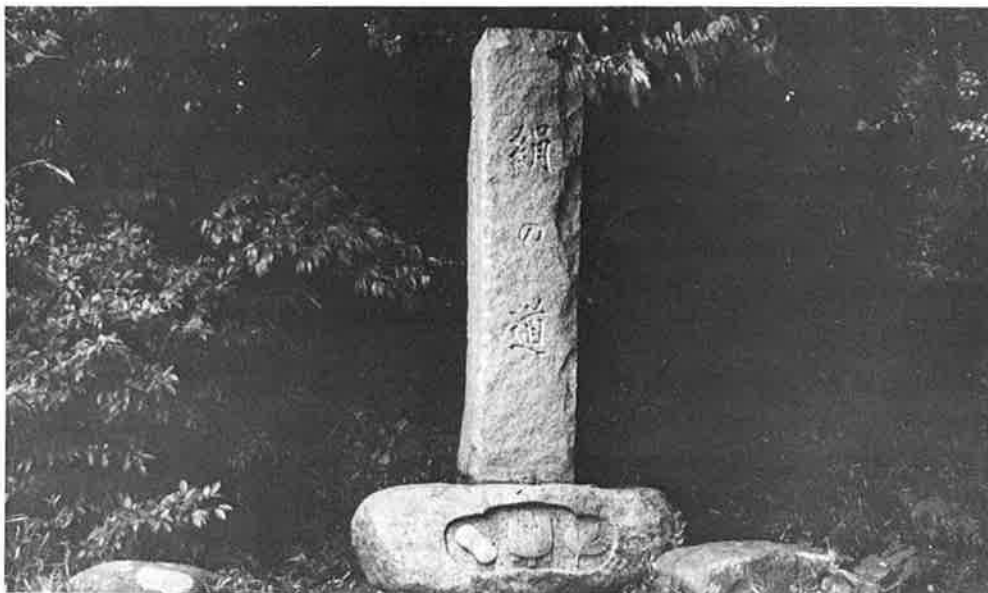
財団だより

多摩川

1984. 3. 第21号



ムナグロ (チドリ科)
夏羽は顔から胸にかけて
黒・冬羽は白くなる。



道の堂入口の碑

■ 多摩川博物誌 ■

⑤ シルク・ロード

八王子から横浜に通ずる道は、いまは国道横浜街道。このハデな道にかくれるかのように多摩丘陵を走っているのが、シルク・ロードと呼ばれる通称鎌倉街道だ。やわらかなその名前とは似つかないわずか幅二メートルに満たない山道——だが、日本の産業史につながる歴史をもっている。

八王子市八日町から横浜街道の横浜線片倉までは、旧道をしのぶよすがもない。が、踏切から左に折れると、この鎌倉街道が、多摩丘陵自然公園のハイキングコースになっているが、昔は横浜へ通ずる“一級国道”だった。

道の左右には、桑畑や野菜畑が段々に連なっている。踏切から約二・五キロで海拔二百十三メートルの錆水(旧由木村)道の堂。晴れた日には、遠くに富士山が美しい。関東の山々や町々も一望だ。そこで野猿峠へのコースとぶつかっているが、鎌倉街道は、道の堂から錆水部落、原町田を経て横浜へ至る。延長五十キロほど。

この道がシルク・ロードといわれて脚光を浴びたのは、万延元年(一八六〇)。その前年の安政六年に横浜が開港、生糸や茶が輸出の花形となったときからだ。甲州街道の宿駅八王子を通過して上州、甲州、信州それに八王子近在など、日本蚕糸業の本場の生糸がせきを

切ったような勢いで、この道から流れた。トボトボと生糸を背負う人、馬の背にくくりつけて運ぶ商人……明治初年のひところは、横浜まで荷馬が続いたといわれている。

しかし、やがて横浜街道ができ、明治四十一年東神奈川——八王子間に横浜鉄道(現横浜線)もできるに及んで、かつては産業史を飾り、横浜から文明開化を伝えたこの道も、いつしか一本の山道として忘れ去られていった。栄枯盛衰——戦後、生糸にかわってウールの産地と変じた八王子の繊維界に、不況の風が吹き、都市公害のために追いたてられて、集団移転の話もでる昨今だ。その一環として、旧市街地の機屋二十一社が四十六年には移転する。引越先は人家のまばらな同市下恩方。一方、機械の近代化などを含む構造改善問題もクローズアップされてきた。

さる三十二年、八王子市の地方史研究家橋本義夫さんが、旧由木村住民の協力でこの道と蚕糸業の歴史を記念して、「絹の道」の碑を道の堂入口の鎌倉街道ぎわに建てた。

多摩ニュータウン計画などで、この「絹の道」の面影はわずかに道の堂付近に残るだけで、ここにも宅地造成の波が押寄せている。

「武蔵風土記」朝日新聞社編1971

多摩川散歩

●多摩川の野鳥を訪ねて ②春先の鳥

武蔵野野鳥の会理事 津戸 英守

多摩川の河口から溯ること約52キロ、南を加住丘陵、西は秋留台地、北側武蔵野台地に取り囲まれ、秋川と、多摩川が合流するこの地、八王子市高月町（旧加住村高月）。裕福な農家が点在し、良く耕地整理された田んぼが広がる。東京では珍しくなった一面のレンゲ畑。秋川から引いた清冽な用水には6月初頃ホタルの群舞が見られる。

福生駅（青梅線）発純心学園行き、西東京バスで滝山で下車、正面に八王子市水道局の浄水場の施設を見、左に廻り、フェンスにそって進む。春4月末から5月にかけて南側の滝山丘陵や高月城跡近くからウグイス、シジュウカラ、ヒヨドリ、コジュケイの声が聞かれる。秋川から引水した水道の水源池には、カルガモが多く、4月初め頃までは、マガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、コガモ、時おりホオジロガモ、キンクロハジロなどが観察され、アオサギの群（約15羽）、コサギなどが休息している。立ち入り禁止のため、ミニサンクチュアリーとなり、カワセミ、イソシギなど常時生活している。

池にそって進み堤防上に出る。右手下流に昭和用水堰があり、広々とした水面には4月末、5月初め頃まで各種のカモが見られる。ヨシガモ、オカヨシガモなど少なくない。多摩川、秋川の合流点は多摩川で最も広大な河川敷で、石河原、砂地、草原、ツルヨシやオギの群落湿地にはヨシの密生地、大待宵草、野茨の香り、カワラサイコの黄、コマツナギの赤い花など、ニセアカシヤの林、コゴメヤナギ、ハンノキの森は野鳥たちにとって楽園となっている。この地が環境庁の特別鳥獣保護区に指定されているのもうなずける。

堤防に立つと眼下に広がる河原から、セッカのヒッヒッヒッ……チャッチャツ……と弾む様な声、水辺のアシ原からオオヨシキリのジャズ、石河原の上空を旋回しながら鳴くイカルチドリ、コチドリ、

セグロセキレイ、キセキレイ、イソシギが水辺にそって飛び交すのがながめられる。堤防を下り岸にある細い道をたどって行くと、浅瀬で魚を捕えるササゴイ、湿地から飛び立つゴイサギの大群。草むらに潜んでじっとしていると、ヒメクイナ、ヒクイナが姿を現わす。用心深いヨシゴイもアシの葉がくれに移動するのが見られる。草地ではヒバリやホオジロの声が盛んである。春には渡りの途中のアマツバメが上空を横切り、山地や高原へ入って行くノビタキの夏姿、春秋の渡りの季節にはムナグロ、キアシシギ、キョウジョシギを初め大形なチュウシャクシギ、ホウロクシギなどの休憩地となっている。

かつて昭和23年頃までコアジサシが渡来し、集団営巣地（コロニー）があった。現在は全く見られない。合流点近くは南多摩郡、西多摩郡、北多摩郡の接点となり、4村にまたがり合流点の中心付近を100メートルぐらい泳ぐと、3郡4村を泳いだものであった（今は遊泳禁止となっているが）。この特別保護区内でカワセミは約7羽ぐらい生活している。多摩川でカワセミの最も密度の高い生息地、それだけ自然や清流が残っている証明かも知れない。

やがて堰の上に出る。見通しが良く正面上流に大岳山のドーム、注意して見上げると、オオタカ、チョウゲンボウ、ハイタカの姿を見る事が多い。このまま引返すより南側滝山城跡に歩を進めてみたい。レンゲの花盛りの頃、毎年この地にアマサギの群が渡って来る。紫紅色とキツネ色、新緑の丘陵を背景に見る数羽のアマサギの姿は一幅の日本画を見る様である。滝部落から急坂を上ると、滝山城跡に出る台地からの多摩川のながめは格別である。近くの丘からカッコーやホトトギス、ウグイス、コゲラの声に混ってイカル、深い谷からサンコウチョウの月日星の三声。ただし桜の花が満開の頃は避けた方がよい。こんな山上まで、カラオケ大会が行われ、大鼓の音がかまびすしくて、とても自然を楽しむ雰囲気でないから。帰りは南へ下って降りた所が、滝山城跡下のバス停である。

私と多摩川

● 万葉の歌意の実践地

調布地区（青梅）



織姫まつり（昭和31年10月、青梅織物協同組合提供）

随筆家 根岸 律男

多摩川というと、きまって引用されるのが万葉集第15巻東歌に出ている「多摩川にさらす手づくりさらさらは何ぞこの児のここだ愛しき」の歌である。1805年（文化2年）、この万葉歌碑を建設するにあたって、時の老中、松平定信（樂翁）公は、調布あたりには、染屋、染地、布田等々の地名があり、又、はた織の技術を伝えた中国からの移住者、韓国からの帰化人が多く住んだというコマエの地も近くにあるところから、ここが適当であろうと、現在の狛江市に建てられたのであった。（これは10年後の洪水で流失してしまった。）

そして、この歌の描かれた調布（たつくり）を意味する調布の地名は、明治20年に改称されたという大田区の田園調布、府中市の隣りの調布市、それに後に青梅市に包含された調布村の3つがあったが、この歌の真意を理解、この「手づくり」の風物を現代に生かした所といえ、ここ青梅市内の調布地区を措いて他にない。

調布（たつくり）の作業工程の始まりは、それこそ川の流れに晒す糸から、布からである。そし

て織物に不可欠の染色業が発達する為には豊富な水が望まれるのであるが、この調布地区はその条件を100%充たすことが出来るといえる。

多摩川の澄んだ流れの中で染色業（俗にこうやといった）の連中がよく晒せる様に糸の端を持って前後にゆすぐと、紅・黄・紺の彩りが前後して、周りの河原の眺めに調和し、如何にも機業地らしい風物をみせていた。

昭和40年ごろ、青梅織物がタオル地生産に変わる前は、川の沿岸の調布地区の家々の庭には、前記の水で晒した五色の糸が、おおよそ六段に高々と干しあげられていたり、家の角を曲がると箆（おさ）の音が急に迫って来たり、実に町中が活気にあふれていた。

ここで、前織物工業組合理事長の田中文吉さんの談を拝聴すると、「この調布地区では、『青梅夜具地』で代表される青梅織物産地の50%の生産があり、活況を呈した昭和33年の時代には、この地区に織機台数4,260台、工場は370軒程もありました。従って青梅全体で当時、年40億円の生産を挙げていたから、調布地区では半分の20億円を生産したことになります。戦時中を除いて昭和1桁から2桁の時代は、原糸や製品機械と部品の売買、市日の雑踏、従業員の厚生行事等がありそれは賑やかでした。昭和31年の「青梅まつり」には、業界では「織姫まつり」として便乗し、女子従業員の幾人かは乙姫の様な衣裳で参加し、その全盛を誇ったものでした。」とのことであったが、全く当時の勢力の10分の1となってしまった現在の状況とは隔世の感が深い。

しかし、明治の中ごろから家内工業的であった時代、明治40年から力織機の入った時代などを経て約100年の間、多摩川を挾んだ青梅地区が、綿織物王国を築いたことは間違いのないところである。

よみがえ

甦れ！多摩川

●多摩川八景



武陽玉川八景之図（江戸初期）

建設省関東地方建設局による現代版「多摩川八景」選定の住民投票が、2月いっぱいまで締切られた。昨年の6月から始まったこの企画は、予め候補地として選ばれた105景の中から、各界の有識者により50景にしぼられ、その中から住民投票により八景を選ぼうとするものだ。なぜ八景なのか理由はわからないが、近江八景や金沢八景といった日本の伝統的な名所・旧跡の案内紹介にあやかっただけのものであろう。

「多摩川河口」から始まって、「一之瀬川と溪谷」（塩山市）に至る50景の候補地の多くは、橋・堰・川原・滝・溪谷といった河川景観と歴史的景観がミックスしたものである。

この多摩川八景を選定する目的は……

- ①河川景観という側面からみた河川環境整備の方向性の確立
- ②環境整備の核となるべき拠点地区の選定。
- ③河川行政に対する意識の高揚（行政需要の喚起）等の一般的広報。

となっている。これを平たく言えば、これまで、護岸工事や浚渫を主とする治水事業が大半を占めていた河川管理者の仕事、河川景観や自然環境の保全を含めた環境整備をも行なっていくとするものといえる。この背景には大きな川に対する

認識の変化が隠されている。つまり、これまでの、洪水は全て川で受けとめようとする治水対策の概念では、どうも対応できなくなりつつあるという事。その為、流域全体で洪水をコントロールする総合治水を考えなければならなくなったことから、川概念をもっと広く堤内地まで広げようとするものと考えられる。もうひとつは、住民の意識の変化である。それは、川を単なる排水路として見るのではなく、身近な快適な環境にしようとする意識が大きくなった事である。その為、従来の河川行政のワクを事業的にも空間的にも広げていこうとするものであろう。これは企画書には明示されていないが、これまでの河川管理のあり方からすれば、大きな変化のはじまりと受けとめられる。

多摩川八景はこの4月に発表される予定である。投票用のポスターに載せられた候補地の写真は、アングルも良く特徴をうまく捉えている。しかしその写真のままのイメージで川へ行ってみると、左右、上下360°の視界の中では、写真の対象は点でしかありえないだろう。それ程、川は広く大きなもので、景色の中にはさまざまなものが含まれる。それが多摩川の現実の姿なのかもしれないが、多摩川に新しい八景を持つとうとする試みは大いに歓迎すべき事である。

これから、夏・秋にかけて、自然観察会、歩く会など流域の住民主催による催しものが多くなる。この新しい「多摩川八景」の事を考えながら川原を歩くのも楽しい事だ。そうした催しに参加しながら、自分なりの八景、五十景などといったものを持つのも一興かもしれない。

江戸初期に描かれた「武陽玉川八景之図」は、世田谷、川崎一帯に限られた、「二子の帰帆」「向ヶ丘の秋月」など当時の観光パンフレットのようなものである。今度新多摩川八景が、流域全体の中で選ばれるとすれば、少なすぎるような気がする。願わくば、先に選ばれた50景も忘れてしまうのではなく、大いに今後の河川整備の為の参考にしてもらいたいものだ。

山道省三

財団の事業紹介

〈研究助成〉

助成集報（第8巻）が完成しました。内容は下記の通りです。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
●多摩川水系魚類の分布及び遊泳行動と水質との関連に関する研究	井 上 実	東京水産大学教授
●多摩川水系における窒素の負荷解析—多摩川の栄養塩に対する環境容量把握のために—	鈴 木 基 之	東京大学生産技術研究所助教授
●多摩川水系秋川流域の農住混在地域における適正な土地利用・水利用のあり方に関する研究	駒 村 正 治	東京農業大学農学部講師
●多摩川水域の環境水および魚介類の細菌相に関する研究	出 口 吉 昭	日本大学農獣医学部水産学科教授
●都市化過程に於ける水利システムの総合的研究—多摩川流域をケース・スタディとして—	玉 城 哲	専修大学経済学部教授
●河川環境に関する計画的的研究—主として多摩川河川敷の保全・利用について—	進 士 五十八	東京農業大学農学部助教授
●多摩川中流域における水質の動態に関する水理学的解析	河 原 能 久	長岡技術大学建設系助手
●多摩川の水利開発史と水利調整に関する研究	宮 村 忠	日本河川開発調査会理事
●水路を利用した水質浄化工法と二ヶ領用水清流化	有 水 疆	農林水産省林業試験場主任研究員
●多摩川河川敷および沿川のタンポポ類の分布と環境の解析	本 谷 勲	東京農工大学農学部教授

〈新刊紹介〉

東京農業大学造園学科助教授 進士五十八 著
 「緑からの発想」 郷土設計論 (¥2,600)
 (株) 思考社 江東区北砂5-20-4-1012
 ☎ 03(648)9127

私たちの生活環境の中に「緑」が不可欠な存在である事を疑う人はいない。しかしながら、その緑をどう捉え、どう考え、どう見るかは千差万別である。本書は、その緑を、草や樹木の緑から、集団としてまとまった時に発見される風景性（総合性）、さらに、人間の歴史や文化、個人的な感情

まで含めて存在する地域性や郷土性を持った緑に至るまで、造園家の眼を通して追求している。即ち、これまで、技術や施策といった範ちゅうでしか語られなかった緑を、水や土を含めたものとして、人間の生活を支えるさまざまな視点から捉え直していこうとするものである。サブタイトルにある「郷土設計論」は、その発想の具現化の手法を示したものである。

著者は、財団の「多摩川シリーズ」の編集委員であり、「河川座標軸論」「親川計画原論」などの文もある。

●多摩川シーズンニュース

- 「秋川市史」刊行 58.12.3. 西武新聞
専門家43人による秋川の歴史・文化を編さん。問い合わせは秋川市社会教育係。
- 「多摩の方言と生活」出版 58.12.14. 読売新聞
羽村町の平井英次氏により第三編目が出版された。問い合わせは☎0425-54-3252平井。
- 「消えゆく多摩の立体図」作成 58.12.15. 朝日新聞
稲城市の「坂浜歴史研究会」により、昭和15年当時の稲城地区の立体図を作成中。
- 「奥多摩湖も汚染」 59.1.11. 読売新聞
都環境保全局の調査により、奥多摩湖が富栄養化しアオコも発生している事が解った。
- 「多摩川河畔 一上中流70年史」出版 59.1.11. 読売新聞
青梅市在住の根岸律男氏が書きためた、多摩川の昨今が出版される。4月以降市販。

- 「モトクロス練習場造成多発」 59.1.11. 読売新聞
モトクロスの練習場が13ヶ所も造られ、自然の破壊や遊ぶ人達への迷惑が増えている。
- 「多摩川50景決まる」 59.1.26. 朝日新聞
建設省が選定していた多摩川八景のうち候補地50景が決まった。住民投票により4月に八景が決定される。
- 「調布堰にアユ魚道」 59.2.5. 東京新聞
天然ソが増えたといわれる調布堰に、ソ上を助ける魚道の改良工事が進んでいる。
- 「多摩川市民大学講座開催」 59.2.4. 川崎市中原市民館で「多摩川のみみがえり」をテーマとした市民講座が始まった。3月24日まで11回の講座。問い合わせは、川崎市教育委☎044-722-7171
- 「主婦グループによるコケ・キノコ調査」 59.2.21. 神奈川新聞
川崎市青少年科学館の呼びかけで集まった主婦による市内のコケ・キノコの調査の中間結果がまとまった。

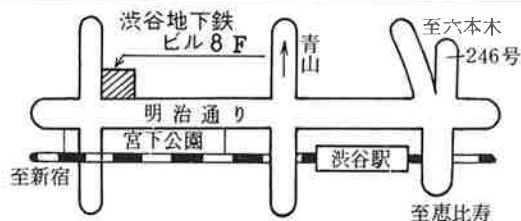
●古写真・絵図等についてのご依頼

財団は多摩川及びその流域に関する古写真、絵図等の集収・整理を行なっています。自然景観・風俗・産業・史跡等の古い資料をお持ちの方は、

借用もしくはご提供いただければ幸いです。

集収した資料は、財団で分類整理し、多摩川研究の参考に使いたいと考えます。ご一報下さい。

- 発行日 昭和59年3月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125